野球部の思い出

電気工学科７期　団野　克己

北九州高専７期生の団野です。私は、昭和４６年電気工学科入学、５１年卒です。現在、佐賀市で法律事務所を開業しています。

北九州高専在学中、私は、卒業まで浩志寮で生活し、部活は硬式野球部でした。

私の野球部の思い出は、３年生の時、夏の全国高等学校野球大会福岡県予選に出場できたことです。

当時、野球部の公式戦は外の部と同じく、高専大会(九州大会)しかありませんでした。私達３年生は、４、５年生の先輩達がおられるので公式戦に出る機会がなかったのです、しかし、私達が３年生なるころ、先輩達や、学校の配慮で、昭和４８年から高校野球連盟に加入することができたのです。憧れの高校野球でしたから、嬉しくてたまりませんでした。

初めて出場した春の九州大会予選は完全に浮き足だってしまい、初戦で京都高校に大敗しました。

５月の市内大会では、初戦の常磐高校に勝ち公式戦初勝利をあげましたが、小倉工業に負けました。このころから少しずつ高野連でやっていける自信がついたように思います。

夏の全国高校野球予選は、一回戦田川工業高校にコールド勝ちしてしまいました。たくさんの高専生が(当時の)小倉球場に応援にきてくれたことを覚えています。２回戦の田川高校にも接戦の末勝つことができました。

３回戦は嘉穂高校に破れましたが、大会初出場で、３回戦まで行けるとは思ってなかったので、今でもよく覚えています。

当時は監督もおらず、野球部といっても素人集団でした。いまはグランドも良くなり、監督もおられてうらやましい環境だと聞いています。

今後も野球部の応援をしていますのでがんばってください。

弁護士として活躍されている団野氏

中国の大地から

副会長・電気工学科７期　角田　敏光

北九州高専創立 40 周年、おめでとうございます。北九州高専が出来てもう 40 年になり、私も昭和 51 年に卒業して 30 年になり、自分の社会人としての歴史と重ね合わせて、時の流の速さと 40 年という歴史の重みを噛みしめています。

「母校と同窓会」というタイトルで執筆依頼受けましたが、実は 6 年前に同窓会副会長を拝命し、お世話をすることになったのですが、直後に中国への国外転勤となり、実際何もお手伝いできず心苦しく思っています。私の人生の中でも北九州高専は「原点」となっており母校の思い出について、少し書かせていただきます。

私が入学した昭和 46 年当時は、北九州高専のある志井は今のように開発されておらず、学校の手前の徳力団地と老人ホームの徳寿園があったのを覚えています。入学後、北九州霊園、常盤高校や志徳団地ができて賑やかになってきました。

高専内でも今はないかも知れませんが、入学直後、いばしい顔をした 2 年生の上級生が教室にみえ、「高専ちゃ、こんなところやー。上級生をなめたら

いかんぞー。」という様な今風でいうオリエンテーション？を受けたことを覚えています。

クラブ活動では剣道部に所属していましたが、先輩方に鍛えていただいたわりには、強くなれず、いつも試合に負けていた記憶があります。（試合に出て勝てないのは、社会人になっても変わっていません。）ただ、クラブ活動の中で、先輩方より指導を受けた挨拶の仕方、酒の注ぎ方などは実社会に出て大いに役立っています。

授業の方は、まじめに出席していた方ですが、あまり身についておらず実社会に出て、あーもう少ししっかり勉強しとけばよかったかなーと「後悔先に立たず」です。

最後に後輩の皆さんへ一言、実社会へ出るとさまざまな圧力があったり、ライバルがたくさんいます。これらに負けず生き残っていくには、「自分に負けないこと」と「他の人になめられないこと」です。
高専時代に強靭な体力と精神力そして最低限の知力を身に付けておいて「さすが、北九州高専生！」と言われる様に頑張りましょう。

中国江蘇省無錫市より

副会長就任直後の角田氏（前列左）

母校と同窓会

副会長・機械工学科８期　松木 俊己

北九州高専だったか、国立高専でしたか、どちらかの名前を最初に耳にしたのが中学３年の受験の時でした。それまでは、高校に進学して・・・という気持ちしかなかったものですからどんな学校だろうか？という思いだったのを覚えています。

八幡西区三ヶ森の家から小倉南区の志井までの距離は、１５歳には遠かった記憶があります。当時の国道３２２号線は、現在とは違い片側１車線の渋滞する道でした。

小倉駅周辺の繁華街から、周りが全て山また山の学校周辺のギャップが凄かったです。後に段々と繁華街に惹かれていったものです。今でもあるのでしょうか、１年生の時のオリエンテーション。非常に忘れられない母校の集団生活の始まりでした。５年生を代表して現在の母校におられる樫村先生、４年生からは、会長の青木さん、副会長の柳田さん、島津さんの各先輩たちが私達を非常に良くご指導して下さいました。特に夜を徹しての柳田さんの人生論は、１５歳には面白く興味あるものだったです。

現在私が勤めております㈱三吉の内藤社長と最初に出合ったのもその時です。オリエンテーションが終って学校に帰ると、学業とクラブが待っていました。私は、勧誘に来られた先輩の優しい心遣いに惹かれまして応援団に入りました。そのクラブで『先輩とは、後輩とは、・・・・』よくご指導頂きました。今でも当時お世話になった先輩、同輩、後輩とゴルフや飲みに行ったり、マージャンをしたりして良く遊んでいます。

先生方にもお世話になりました。特に御世話になった先生は、機械工学の故岩渕先生、一般では故上杉先生、そしてクラブの顧問をされた電気工学科のヤング緒方先生でした。３年の時の私達は留年生が

多く，岩渕先生は、それを危惧されて、設計・材力が理解できるようにと、先生自らプリントに問題を作成してくれました。そのおかげで良く理解できました。（頭の良い方には、情けない話かもしれませんが）

上杉先生には、当時（約２８年前）ソニーから発売されましたスピーカが両方にある（当時は、これが業界初でした）ジルバップというカセットデッキのローンの保証人になっていただきました。当時の２０歳の私には、保証人がどれだけ大変なものか、よく判っていなかったようです。学校の廊下で先生とお会いした時の挨拶は、『あれ、払いよるかの』『勿論ですよ』でした。今ではもう時効ということでお話しますが、あのカセットデッキは、同輩の誕生祝の資金作りに１ヶ月くらいで質屋に入り、社会人になって出しました。先生、ごめんなさい。

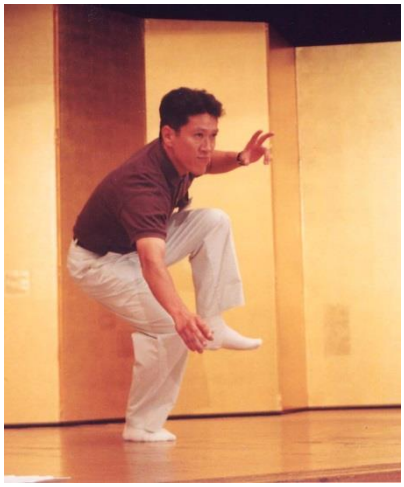
最後にクラブの顧問をされた、ヤング緒方先生です。当時の私達の応援団の顧問は、大変だったと思います。先生は、表情も変えず文句も言われずに、ご指導して下さいました。私にとっては、先生であり、また兄貴のような存在でした。

母校を思い出しますと、上記のようなことが頭に浮かびます。この紙面だけでは、書き尽くせないくらいの思い出と人の名前が記憶にあります。私にとって母校は、いろんな方と出会う場でありました。そして、その方達から学んだ事、経験した事が社会で役立っております。

この文頭で紹介しましたように、私の勤め先には、学生時代に知り合った社長や後輩の堀君もいます。どこかしら、私の気持ちの中に学生時代の続きの部分もあるように思われます。（現実は、３人の子持ちですが。）

卒業して、今、同窓会の活動のお手伝いをしております。同窓会名簿が贈られて来る度に、自分が在校していた年度あたりの名簿に目を通しますと懐かしい名前とその人との思い出が蘇ります。酒の肴にもなります。会いたくなれば連絡も取れます。それだけでも、私にとって名簿は有難いものです。

今後とも、先輩が作られました同窓会が後輩に引き継がれ末永く活動されることを祈念して『母校と同窓会』を終りたいと思います。



高専節・「まだまだ～」、「よーーし」

創立４０周年おめでとうございます

化学工学科３期（８期）　守塚　勝

創立４０周年を迎えられましたこと、心よりお喜び申し上げます。

私が、昭和４７年に入学してから早３３年。改め

て月日の速さを感じさせられます。学生時代を振り返ると沢山の思い出があります。

１・２年の寮生活は高専生活の原点でした。私が入寮した当時の部屋割りは、３年生が部屋長で２年生１名、１年生２名の４人部屋でした。当然のことながら１年生は小間使い。先輩の夜食のラーメン作りに走りまわった日々を思い出します。いまでは寮もすっかり様変わりしたようですが、当時の縦社会の体験と人的交流は私の財産となっています。

また、勉強もろくにせず野球に打ち込んだ日々を思い出します。中でも一番の思い出は、所属していた野球部が高野連に加盟できたことです。入学当時は活動の場が高専連の大会に限られており、高校野球は別世界と諦めていましたが、顧問をはじめ諸先輩方のご努力により、２年生の夏（昭和４８年）に念願の高野連に加盟することができました。夏の大会前に、全員が長髪をバリカンで丸刈りにし、必勝を誓ったことを思い出します。

初出場での戦績は、１回戦　田川高校にコールド勝ち、２回戦も田川工業を倒し県大会出場を賭けた３回戦は嘉穂高校に敗れはしたものの、「初出場で大暴れ」と当時の新聞紙上を賑わしました。

３年生では２代目の主将（高野連）をやらせていただき、桜井監督、河野顧問のもとで毎日、夜遅くまで厳しい練習に耐えたことを思い出します。夏の大会の戦績は惜しくも１回戦敗退でしたが、北九州市民球場で応援団をはじめ大勢の応援のもとで、高校球児としての最後の夏を完全燃焼することができました。

４年生の高専祭では先輩が残された伝統の市中行進と小倉城での応援団による高専節の演舞をなんとしても成功させようと学生集めに苦労したこと等、懐かしく思い出されます。

とりとめもない学生時代の思い出話に終始しましたが、４０周年を迎えるにあたり、同窓会が主催しての周年行事はどこの高専も行っていないということをお聞きし、改めて北九州高専同窓会事務局の方々のご努力に頭が下がる思いであります。最後に、わが母校のますますの発展と同窓の皆様方のご健勝とご活躍を祈念いたします。

世界へ向けて夢を抱いて

化学工学科３期（８期）　斉藤　尋昭

創立４０周年おめでとうございます。
少しでも後輩の皆さん方の参考になればと、アメリカから投稿をさせて頂きます。

１）高専での期末試験の意義

高専での前・後期の試験は想い出が多くある。特に４、５年生の頃は、試験の前日に油嶋君（新日鉄化学勤務）宅に試験勉強といって集まり、ほとんどが遊びに時間を費やし、少しだけ勉強して、翌日の試験に臨んでいたが、そこそこの成績で単位も取り、無事高専を卒業することができた。

会社に入っても資格や昇格、昇給試験等もあるが、こうした高専時代の経験によって、直面した課題を乗りきる要領だけは身に付けたような気がする。問題やトラブル等に立ち向かうタフネスさを持つことは、社会に出てからも、重要なことだと思う。

２）世界に眼を向けて

高専時代に一つだけ熱心に勉強したものがある。それは英会話である。三年生の頃からリズム＆ブルースのバンドを組んで当時高専祭の「ラバーソウル」で演奏をやったり、４年生の頃にはＪＡＺＺにも興味を持つようになっていた。

兄貴のような存在だった日高先生とロリンズやコルトレーンの話に熱くなった日もあった。７６年の春先、ＪＡＺＺのアルトサックス奏者のジャッキーマクリーン氏のコンサートライブが博多であり、

当時、小倉にあったＪＡＺＺ喫茶「アベベ」のマスターからマクリーン氏が博多の西鉄グランドホテルに泊まっている情報を得て、ライブの前に立川君（黒崎播磨勤務）と会いに行った。ホテルに着いて部屋をノックしたところマクリーン氏は上半身裸で戸口に立っていた。ちょうどシャワーを浴びるところだったらしい。後で考えると大変失礼な事をしてしまったと思ったが、結局待つこと約１０分、マクリーン氏は嫌な顔一つせずにロビーで我々に会ってくれた。ところが、その時、我々は全く英会話が喋れなかったのである。

このマクリーン氏との出会いをきっかけに私は世界を意識するようになり、また英語のコミュニケーションが取れなかった事を遺憾に思い、その後約１年間、教会で英語のバイブルクラスに通ったり、ＮＨＫの英会話を勉強したりして多少、英会話が喋れるくらいまでに至った経緯がある。

高専卒業後、東京農工大を経由し本田技研へ入社し、自動車塗装ラインの生産技術を担当した。化学工学の基礎知識は当然、必要だったが、また、ヨーロッパや北米で仕事をする機会も多くなり、国際感や英会話が役にたち、マクリーン氏との出合いのお陰だと、今でも感謝している。

３）北米で夢の実現

最初のアメリカ駐在から帰国して数年後、９０年代半ば、私は夢を抱くようになっていた。いつか自分の意思が入った新工場をアメリカに建ててみたい、というものであった。そして１９９７年、再びアメリカへ駐在するチャンスが巡って来た。

オハイオ州にある北米ホンダの生産企画室で新工場建設の実行企画を担当することになった。約２年間かけて事業の成立性、新会社設立のコンセプト創り、工場コンセプトの検討、システムコンセプト、土地の選定等、ゼロスタートでの企画検討はボリュームも多く、とても大変な業務だったが、振り返ってみると、クリエイテイブで大変面白いものであった。

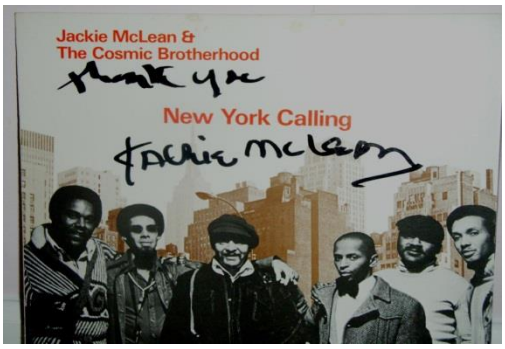
１９９９年、我々の提案が経営会議で承認され、建設プロジェクトが発足となった。その後、工場建設プロジェクトの事務局を、担当し、２１ケ月という最短スピードで工場を建設し、２００１年１１月に量産を開始した。最初の１台目の量産車がラインオフする時はさすがに涙があふれる想いで「造る喜び」を実感した。

昨年、２本目の完成車組立ラインが量産を開始し、現在ホンダアラバマ工場はエンジン工場も含めて、ライトトラックの完成車を年間３０万台生産する能力をもっている。この工場の稼動によって従業員やサプライヤーさん、地域社会のさまざまな人々が生活の糧を得て、また多くのユーザーがホンダの車を運転して楽しい生活を送れる事を想像すると、もの造りで社会へ貢献できることは有難いことで、やりがいを感じるところだ。

４）おわりに

現在、ジャッキーマクリーン氏は７３歳。約３０年振りにマクリーン氏と再会できること、これが今の私の夢の一つである。

高専の後輩の皆さん方が、世界へ向けて、夢を抱いてご活躍できる事を願っています。



ジャッキーマクリーン氏のサイン（１９７６年）

現在のホンダアラバマ工場

３人目こそ！？(^_^)v

機械工学科９期　小濵　光太郎

創立４０周年おめでとうございます。私も高専を卒業して、早くも２７年が過ぎました。昭和４８年に北九州高専に入学し、何とか５３年に卒業しました。その高専時代の思い出について書かせていただきたいと思います。

まず寮生活についてです。私の自宅は小倉でしたが、入学試験を受けたときから、高専に合格したら、“寮に入る”と自分で決めていました。“寮”という響きがとても魅力的でした。しかしこの期待も入寮早々に、見事に裏切られました。当時の１棟の部屋は、同学年の４人部屋でしたが、同じ階に上級生の部屋が混在していました。中学を卒業したばかりの美少年の隣に、髭を生やしたおっさん（Ｙ住先輩）がいるのです。もうびっくりです。今思えばすごいカルチャーショックでした。食事は、あまり美味ではなかったです。特にご飯は、たぶん古古米を炊いているのではという味でした。しかし朝食の味噌汁、納豆は絶品でした。一番きつかったのが先輩から使われることでした。コーヒー、ラーメン作りから寝るまであんまでとバラエティにとんでいました。しかし、これらの先輩には、夏休みに旅行に連れて行ってもらったり、食事がまずいときに第二食堂（大石食堂：ここのラードたっぷりの焼きそばに、ずいぶんお世話になりました）に連れて行ってもらったりと可愛がってもらいました。３年間寮にお世話になりましたけど、今思えばつらいこともありましたが本当にいい思い出です。

次に部活動です。軟式庭球部に入部し、朝は早朝から夜は寮の食事時間ぎりぎりまで、よくラケットを振りました。軟式庭球部といえば軟弱なイメージを受けるかもしれませんが、当時はかなりハードな練習をしていました。裏の霊園にもよく登りました。春の合宿は、寮の自習室にみんな雑魚寝で頑張りました。雨が降ったときは、ラケットをトランプに持ち替えナポレオンの練習をしました。５年の時には宿敵佐世保をやっと破り、全国高専大会に出場し３位になりました。この軟式庭球部では、よき師、よき先輩、よき友、よき後輩に出会い、私の一生を変えたといっても過言ではありません。

これら寮生活、部活動等を通じての高専時代の人間関係は、今でも続いていて、本当に私の財産です。わが３人の息子にもこの経験をさせたくて、高専を受験させたかったのですが、上２人は残念ながらそのレベルに達していませんでした。３人目はなんとかと思っています。そのときはよろしくお願いします。

４年生の工場見学旅行にて（皇居前）
左より入江、松木、宮原、矢山、榎本、小濵

ロボコン全国大会応援の常連

機械工学科１０期　本村　真

人生とは不思議なもので、松田聖子が初々しくデビューした頃に、北九州高専を卒業して、地元の鉄工所に就職したはずの私が、１５年後には、東京を活動の場とする技術系ソフト開発のＳＥとして生活するようになっていました。それなりに充実した日々を送ってきましたが、北九州高専との距離と時間が遠ざかるにつれて、母校の事など頭の隅から消えていきました。

そんな９２年の冬、高専ロボコン全国大会の番組を偶然に見る機会がありました。まだ、あどけない顔の高専生が、両国国技館で、ゴールデンタイムの主役として輝いていました。残念ながら母校は映りませんでしたが、彼らの知恵と技術力の高さ、なにより、真剣に自分達のロボット制作に取り組んでいる姿を見て、パソコンなどという言葉すらない時代に、毎日のように電算室にいり浸っていた自分の学生時代の姿と重ねていました。そして、その翌年から、全国大会の一般入場券を入手して、客席からファンとして観戦するのが私の年中行事となったのです。

９６年の秋、北九州高専同窓会から、ロボコン応援団参加者募集の手紙が届きました。ついに母校、国技館に来たる！　まるで甲子園出場のような興奮を覚え、即刻参加申し込みをしました。しかし、大会の日が近づくにつれ、一抹の不安が広がってきたのです。参加予定者のほとんどが知らない方々ばかり、雲の上の人と思っていた１期生の名前もズラリと並んでいます。しかも、母校応援の後、宴会の席もあるというのです。

大会当日、会場で盛り上がる先輩方の隅で、誘い合って参加した同期生の吉牟田と細々と応援。残念ながら、１回戦敗退となりましたが、母校の名前が呼ばれた時には鳥肌がたち、試合開始のカウントダウンでは、自分の心臓の音が聞こえていました。

後輩達の応援をした後、ついに緊張の宴会の席。しかし、関東支部長の乾杯の音頭で、その不安はあっけなく一掃されました。同じ母校で青春時代を過ごした者は、年齢に関係なく、高専生に戻ったのです。私は、２０年ぶりに、「先輩」という言葉を口にし、後輩の面倒を見る先輩方に甘えている入寮したての１年坊主に戻っていました。

その年以降、北九州高専は、毎年のように全国大会に勝ち進み、ついに全国大会優勝も成し遂げ、強豪校としてロボコンブームの一翼を担ってきました。

私も、毎回、厚かましく母校の応援団に参加させて頂き、先輩や後輩の皆さんと一緒に、高専生に戻って、有意義な時を楽しく過ごしています。

そして、いつもの宴会を終えて帰路に着く時、電車の窓から見える両国国技館に向かって、ロボコンに携わっている学生の皆さんや先生方、学校関係者の皆さんへの感謝の気持ちを心の中で唱えながら、ゆっくりと現実の自分に戻っていくのです。青春時代の気持ちを心いっぱいにして...。

応援が終わり、両国駅で「来年も会いましょう」と集合写真、ロボコン応援の常連本村氏（中段左端）

お祝いのことば

機械工学科１２期　安部　次男

北九州工業高等専門学校創立４０周年、誠におめでとうございます。熱くご指導くださった先生方、そして学校関係者の皆様には、お祝いの言葉とともに、心よりお礼申し上げます。月日が経つのは早いものです。私がこの学校の門をくぐってから２９年の歳月が流れていきました。この学校で過ごした５年間は私達卒業生にとりましては、決して忘れることのできない楽しい思い出です。中でも高専祭におきまして『手作りのみこし』を小倉城に運び、皆で学生会歌を熱唱したことは私の宝物といえる思い出です。

現在、私は株式会社を設立し代表取締役社長として、時間に追われる日々ではございますが、この４０周年を契機とし一層のご支援をお約束いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

TOTO における同窓会（北専会）活動

機械工学科１３期　山﨑　洋式

ＴＯＴＯは地元北九州市に本社を置く水回り器具のメーカーです。現在、北九州高専卒業ＯＢは６１名、最年長は４期電気の櫻木さんです。ＴＯＴＯ本社近辺在住者の同窓会活動としては、４月に新人歓迎会、７月にビヤガーデンで納涼会、１２月に忘年会を恒例行事として実施しています。本社近辺以外にも同窓会の和を広げたいのですが、そこまでは到っていません。

今年度の北九州高専卒の新入社員は２名。内１名は待望の女性です。（固定化し気味だった恒例行事の参加者も変わる！？）私たち卒業生一同も、与えられた業務を真摯に受け止め、他の新入社員に負けないよう取り組んでいただきたいと思っております。

卒業生は研究／開発部門だけでなく、海外・企画・営業部門など多岐な業務を担当しています。

多感な青年期を有志台で過ごし、もの作りに明け暮れたＯＢたちは、どこか同じ匂いがします。皆さんも、初めて一緒に仕事をしたときに「同じ匂いがするな」と感じた方が、高専ＯＢだったことはありませんか？以前と違い、高専を卒業して直接入社する方だけでなく、大学に編入された方や、他の企業を経験されてから入社される方もいます。高専名が直接出てこない方からも、醸し出す独特のエンジニアとしてのフィロソフィーを強く感じるケースが多いように思います。もの作りが大好きで、技術指向が強くて、問題解決能力が高くて、とにかく動いて、とにかくものを作る。北専会はそんなものたちの集まりです。恒例行事の参加者は異口同音「一番落ち着く」とのたまいます。

望むべくは、卒業生の中から技術オンリーでなくビジネス指向も併せもった重役が育って、ますます北九州高専の名を高めてくれることでしょうか。

５年生教室でのスナップ

卒業式後の懇親会中野・前原・松岡・高見・福岡・山﨑

北九州高専創立 40 周年にあたり

機械工学科 14 期　岩元　信夫

北九州高専創立 40 周年にあたり、同窓会事務局の方から原稿執筆の依頼を受け少々困惑しているところです。私は昭和 53 年から 58 年までの 5 年間を高専で過ごしました。卒業後はダイダン株式会社に入社し、22 年間各地の建設現場にて「建物内の環境を造る」という仕事に従事しています。

学生時代の私を振り返ってみると学生の本分はそこそこにそれ以外の自分の好きな事、熱中出来る事ばかりやっていたような気がします。幅広い年代の仲間との付き合いを通して色々な事を学び、高専時代が今の私の人生の基盤となっていると言っても過言ではないでしょう。非常に貴重な 5 年間だったと思います。その中でも特に印象に残っているのが、部活動と高専祭です。

私はバレー部に所属していました。当時は佐世保高専が強く「打倒佐世保高専」を目指し日々の練習に明け暮れたのを思い出します。5 年生の時の九州大会で運良く優勝でき、9 年ぶりに全国大会に出場できたことが一番の思い出です。(全国大会での結果は聞かないで下さい。)

高専祭では「レッドゾーン」という当時流行っていたディスコを開催していた事が思い出されます。私が入学する前には「ラバーソウル」として開催されていたらしいのですが、それを復興させようと堀曜一さんを始めとした有志で開催しました。会場設営から選曲、チケットの販売等、寝る間も惜しんで皆でやっていた事が思い出されます。現在、当時の仲間とは年賀状のやり取りくらいしか行っていませんが、今度集まって飲みたいものですね。また当時の曲の入ったテープが残っていたら是非連絡して下さい。

これ以外にも寮での生活やバイトの事、お酒の話など思い出は限りなくありますがきりが無いのでこの辺で止めておきます。

ここで後輩に期待することというかアドバイスを一言。高専時代は人生の中で非常に重要な時期です。何でも良いので何か熱中できる物を見つけて下さい。また友達をたくさん作って下さい。これから先の長い人生の中できっと役に立つ事がありますよ。

最後に、４０年という永きにわたり数々の優秀な人材を社会に送り出していただいた歴代の教職員の皆様および同窓会の皆様、現役の高専生、また北九州高専の益々の御発展を祈念致します。

息子に託した“起死回生のホームラン”

化学工学科１０期（１５期）　山本浩一

私が高専の 4 年生だった昭和 57 年。その前年に初刊行されたばかりの文集“轍”に、私はこんな言葉を綴っていました。「起死回生のホームランを打てるような男になりたい。」そんな思いで、学舎を跡に神戸へと旅立った私でしたが、現在は故郷の“筑豊”（鞍手町）に戻り、緑に囲まれた母校で PTA 会長をしながらのんびりした生活を送っています。一見、志半ばで夢破れ・・・と映るかもしれませんが、全校児童わずか 67 名の母校「西川小学校」を舞台に、そのシナリオを書き直すことにしました。

それは、息子がまだ幼稚園児だった頃まで遡ります。ある日、息子の野球に対する“観察力”の凄さに驚かされたことがありました。一投一打に一喜一憂するわたしを尻目に『パパ！　城島　さっきのバットと違うバイ！』と、ゲーム以外の選手の“一挙手一投足”までをも観察していたのです。その頃から、夕暮れ迫る田んぼで、父と子二人だけのキャッチボールが始まりました。

息子が小学生になった 2000 年、私は息子に野球の“楽しさ”を教えるため部員 4 名で「西川アパッチ野球軍」を結成し、その監督となりました。あれから 5 年、息子は確実に成長し手の届かないところへ向かっている、そんな気がする今日この頃です。

私には、プロの世界がどんなものなのか？また、どれほど難しいのか分りませんが、山村の分校のような、競争心さえも芽生えないスローな環境の中から“プロ野球選手を輩出する”ということが、まさしく私にとって「起死回生のホームラン」ではないかと思っています。

都会から田舎への U ターン。決して金銭的には裕福ではありませんが、日々充実した気持ちで頑張っています。全国でご活躍の“高専生”のみなさんの今後ますますのご活躍を遠く福岡の空よりお祈りしています。

在校生の皆さんへ

機械工学科 16 期　安田　隆博

この度の母校 40 周年おめでとうございます。16 期機械の安田と申します。会社は、現同窓会長の青木先輩と同じく、北九州市に本社のある黒崎播磨㈱で、現在オーストラリア駐在として、シドニー近郊に住んでおります。

私が卒業したのが 1985 年ですからすでに 20 年の月日が経ったのですね。皆と馬鹿ばっかりしていたのが、ついこの前のように感じます。高専での 5 年間は寮生活をし、学生会や高専祭、寮祭と、今思い出すと楽しかったような、辛かったような、何とも言えない日々を送ることが出来ました。今でも 4～5 年に一回のペースでクラスの同窓会をしては集まった皆と当時の思い出に慕ったり、お互いの風貌の変わり様に驚いたりしております。

話は変わりますが、私の学生時代は剣道部に所属しておりました。1 年の時にはソフトボール部とか一番風呂部とか呼ばれておりましたが、練習は結構きつかったと思います。2 年生の時から試合に出して頂いて、先輩方の期待を背負って試合に臨んでいたものの、結局、大した結果は残せず仕舞いでした。

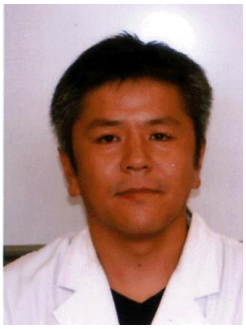
その後、会社でも剣道部に所属し、現在は仕事の余暇を利用して、毎週日曜日と火曜日に家の近くのオーストラリアの大学で剣道部の講師をしております。こちらは多民族国家なので、オーストラリア人だけでなく、スリランカ人、イラン人、中国人、韓国人の学生が一緒に稽古をします。彼らの理論は日本人のそれに比べ、堂々としたもので、2 ヶ月前

に始めた者が有段者に向かって「こうすべきだ」等の指摘をしたり、ようやく面をつけた学生がその日から上段に構えてきたりします。（注；日本では初心者は中段に構えるのが普通）まだまだ、腕は未熟なので簡単に往なせますが、男女問わず体が大きいのでぶつかってこられると怪我をしそうになります。いずれにしても日本では味わえない楽しさがここにあります。

在校生の皆さん、これからは海外に出ることは普通のことです。現地の人間との交流は武道に限らずスポーツ全般、また文化的なものも現地の人々と友好を深めるのに十分と思います。高専での５年間いろんなことにチャレンジをし、いい思い出を作るよう頑張ってください。それが社会へ行って大いに役立つと思います。皆さんのご健闘を祈っております。

写真は大雨の中集まったメンバー。
実際は 20 名位集まります。（小生左から 2 番目）

北九州高専４０周年のお祝い



機械工学科２０期　後藤 稔男

本年、母校北九州工業高等専門学校が創立４０周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

私は２０期生として北九州高専が「成人式」を迎えた昭和５９年に入学しました。入学当時は工事中だったモノレールは間もなく開通し、何もない田舎だった学校周辺は在学中に新興住宅地として変貌を遂げていきました。そして社会ではＯＢの先輩方が経済大国になった日本の企業の第一線で活躍されていたため高専卒業生は高く評価され、さらに就職時にはバブル景気とも呼ばれた未曾有の好景気の恩恵を受けることができた、最も恵まれた世代であったと思います。

そのせいで、という訳ではありませんが、当時の自分を振り返れば「高等」な「専門」分野の技術を学ぶためにコツコツと努力するより、いかに楽をして単位をとるか、その方法ばかり考え、それでいながら将来に対しては「何とかなるだろう」と確たる根拠もないのに楽天的だったような気がします。

時代は昭和から平成へ変わり、先行き不透明な時代と言われ高等教育機関のあり方が話題になることも多いようですが、不惑を迎えた母校、北九州工業高等専門学校の卒業生が今後も産業界の最前線で活躍されることは変わらないと確信しています。

体育大会で大活躍し、高専ロボットコンテストの

全国屈指の強豪校でもある母校の近況を耳にするたび大変誇らしく思います。今後の母校のますますのご発展と同窓生の皆様のご活躍を祈念いたします。

うれしたのし高専女子学生

副会長・化学工学科１７期（２２期）
田代あかね（旧姓・阿部）

卒業してから早いもので１５年になりますが、今となれば「恐怖のシメ」も「魚町銀天街をジャージ姿で歌った学生会歌」も「刺されるとボッコリ腫れ上がる高専ムシ」も「夏になると教室の天井から振ってくるカメムシ」もどれも懐かしい思い出です。

私が入学した時は各学年に女子学生がいたもののそれでも全校で３０人ほどでした。女子学生が増えはじめていたとはいえ、まだ圧倒的に男子学生が多い状況だったので体育大会やクラスマッチでは扱いが別でした。運動が嫌いだった私にはこんな嬉しいことはなかったのですが、そのしわ寄せで男子は大変だったのではないかと思います。申し訳ないと思いつつも憧れの先輩を見つけては観戦したり追っかけしたり、女子学生だからできる楽しみ方をして心の中で「高専サイコー!!」と叫んでいました。それとは別に学校の行事に参加すると「ヨーグルッペ」や「ペプシコーラ」をもらえる事も私にとっては楽しみでしたが・・・。「優勝したら休講にしてください！」そんな教官とのやり取りが事前にあった時にはクラスの応援にも力が入ったものでした。

クラスマッチに限らず、天気が良ければ「ソフトボール日和ですねぇ」などとあれやこれやと理由をつけては休講にしてもらおうとしていたような気がします。見かけも中身も超・健康だったにもかかわらず保健室に出没しては入り浸り、秋吉先生の仕事の邪魔をしていました。気になる人ができると日高教官室へ押しかけては相性をみてもらったり、上杉教官が映画好きだと聞きつけてからは「気になる作品があるので観ませんか？」と持ちかけビデオ鑑賞会のために教官室を占拠したりと、後輩の手本になるどころか女子学生なのをいいことやりたい放題だったと反省するばかりです。

卒業後、バブル景気だったこともあり、大した努力もせず地元に就職できたのですが、手に職をつけたいと思いカイロプラクティックの仕事を始めました。高専祭に体験施術会として参加させてもらったことは貴重な経験と自信になりました。

現在は九州を離れて専業主婦として（少しばかり韓流にはまりつつ）毎日を送っています。今回、思いがけない原稿の依頼で恥ずかしくも楽しかった高専での５年間を振りかえる時間を持つことができ、同窓会に感謝しています。

ご主人（機械２４期）とともに

岩渕先生の 13 回忌に思う

事務局長・機械工学科 9 期　入江　司

「入江君、小倉まで来てくれないか」昭和 61 年の冬のことであった。指定された場所、「焼鳥本陣」に行くと岩渕先生と上杉先生が待っておられた。岩渕先生は卒業研究の指導教官であり、長岡技術科学大学 1 期生として修了した私がどうしても両親のいる地元企業に就職したいのを何かと応援していただいた先生である。一方、上杉先生はクラス担任であり、勝手に自宅に上がりこんでは空腹を満たしていただいた二人とも頭が上がらない恩師である。

開口一番、「君の手紙は読ませていただいた。その上で今日は大事な話があるので、わざわざ小倉まで来ていただいた。」と言われた。実は、この日の一ヶ月ほど前、高専から呼ばれ、「高専の教官として帰って来ないか」と話をいただいていた。学生時代から最も恐れていた国清先生との面談があり、「高専に帰って学生指導と研究やってみてはどうか」ということであった。

当時の私は、地元の黒崎窯業（現黒崎播磨・青木会長と同じ会社）の技術研究所に所属、ファインセラミックス製造プラントのプロジェクトチームの一員として多忙な日々を送っていた。高専に帰れるという、私にとっては本当にありがたい話であったが、「研究」という言葉がどうしても受け入れられずに、折角の話だが断りの手紙を学校に送っていたのである。

「そうかたいことを言うな。君は高専が嫌いか」、「いいえ大好きです」。「後輩の面倒をみたくないか」、「いえ、そんなことはありません」。「上杉先生、これでいいでしょう。後は私に任せてください」。「すみませ～ん。ビール 3 杯お願いします」、「よし、乾杯しよう」。これで、私の高専教官としての人生が決まってしまった。会社のプロジェクトも途中であったために、昭和 61 年 9 月からの採用となった。

採用後、色々なことを言われた。「入江君が帰ってくると聞いたから、君の兄貴（機械 4 期）と思っていた。なんだ君か」、「私が校長の今なら、黒崎窯業みたいな会社から採用しないのに」

後からわかったことであるが、岩渕先生が 1 年だけ学科長を務められた昭和 61 年に国清先生が退官となり、その後任の人事を岩渕先生がされたのであった。「巨人軍江川の空白の一日」と同じような入団だったのである。

高専に採用後も何かとお世話になった。研究のことなど何も話されなかったのに、九州工業大学の潤滑研究室を紹介していただき、他大学の潤滑研究グループの中で研究することにもなった。プライベートでは、先生の大好きなゴルフに誘っていただき、湯布院の別荘を拠点として私の家族も一緒に楽しませていただいた。

それから同窓会のことである。「そろそろ 1 期生も 40 になる。これから余裕もでてくるはずだ。ここに、機械工学科卒業生のデータがあるので、同窓会名簿から作ってみないか。」見せていただいたデータは、「マルチプラン」というデータベース用のソフトに、全卒業生の出身中学、現住所、勤務先などが記載された詳細なものであった。他学科のものもそれぞれ学科の先生に提供していただき、最初は私が打ち込んでいたが、あまりに遅いので、私が読み上げて先生が入力された。こうして、学校創立 25 周年の平成 2 年秋、同窓会名簿が完成し、以後同窓会活動が本格化することになったのである。

しかし、先生のお体を平成 4 年くらいから病魔が蝕みはじめていた。そして、平成 5 年 4 月 14 日、先生は永眠された。ご家族からすぐに連絡があり、駆けつけてできる限りのお手伝いをさせてもらった。当時、携帯電話やメールなどないときである。それでも先生が作られた同窓会名簿で連絡がつく

範囲に訃報を届けた。通夜、告別式には弔電も含めると 400 名の同窓生が先生の早世を悼んだ。偉大すぎた先生だった。

平成 10 年 3 月 21 日、本来であればこの年度に退官される予定だった先生を偲んで、ご家族を招待して岩渕先生追悼同窓会を開催した。関東から入沢先輩、東海から一里塚先輩と多くの同窓生が集い会った。私は代表して先生に挨拶をさせていただいた。「先生のおかげで、今の自分があります。私の人生があります。先生が心配されていた学位を必ず取得します」と。

先生との約束の学位は少し時間がかかりましたが、先生の教え子の佐賀大学の瀬戸口先生と樫村先生のお力でこの 3 月取得することができました。今年は、学校創立 40 周年であり、くしくも先生の 13 回忌にあたります。先生が最も気にかけられた同窓生で先生を偲ぶために 40 周年の記念事業を行ないます。岩渕杯も久しぶりに開催します。先生の墓前にも参らせていただきます。先生の奥様は追悼同窓会のときは、今日はおじいちゃんのお金で行くんだよと、お孫さんを東京ディズニーランドに連れて行かれたそうです。お孫さんたちがまた行きたいと言っていますので、今回も東京ディズニーランドに連れて行ってください。

次は 50 周年、そのときには私も先生が亡くなられた年齢になります。それまでは、事務局長としての任務を果し、後輩にバトンタッチしたいと思っています。50 周年の岩渕杯は私が優勝することを宣言します。いつまでも見守ってください。

不肖の弟子より。

同窓生とゴルフを楽しまれる岩渕先生（前列右端）

故　岩渕先生追悼同窓会　H10．3．21　富士見ホール